

緊急集会「イスラエルによるガザ侵攻を考える」 資料集

2009年1月11日（日）如水会館 1階 如水コンファレンスルーム

主催：東京外国語大学・中東イスラーム研究教育プロジェクト

資料作成者：

錦田愛子（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所非常勤研究員）

■ イスラエル／パレスチナ紛争関連年表

- 1897年 バーゼルで第1回世界シオニスト会議
- 1914年 第一次世界大戦開始
- 1915年 フサイン＝マクマホン往復書簡始まる
- 1916年 サイクス＝ピコ秘密協定
- 1917年 バルフォア宣言発表
- 1920年 サン・レモ会議（イギリスのパレスチナ委任統治が決定）
- 1929年 エルサレム「嘆きの壁」事件（アラブ勢力とユダヤ勢力の衝突）
- 1936年 「アラブ大反乱」が始まる（委任統治とシオニストへの反対運動）
- 1947年 国連総会でパレスチナ分割決議（第181号）を採択
- 1948年 デイル・ヤースィーン村などで虐殺（この前後から「ナクバ」始まる）
イスラエル建国宣言、アラブ諸国軍との衝突が始まる
国連総会決議第194号が採択（パレスチナ難民の帰還権を認める）
- 1964年 パレスチナ解放機構（PLO）設立
- 1967年 「六日間戦争」でイスラエルが西岸地区とガザ地区を占領
国連安保理決議第242号が採択される（占領地からの撤退を要求）
- 1969年 ファタハのヤーセル・アラファートが PLO 議長に就任
- 1970年 エジプトでサーダート大統領が就任（ナセル主義の終焉）
- 1978年 キャンプ・デーヴィッド合意
- 1979年 エジプト＝イスラエル平和条約締結
- 1982年 サブラー・シャティラー難民キャンプでの虐殺（レバノン内戦）
- 1987年 第1次インティファダ（民衆蜂起）開始
- 1988年 PNC がパレスチナ独立宣言（イスラエルとの共存を認める）
- 1991年 マドリード中東和平会議が始まる（PLO は参加が認められない）
- 1993年 オスロ合意（＝DOP 締結）（イスラエルと PLO の直接交渉が始まる）
- 1994年 パレスチナで暫定自治が開始、アラファートがガザに入る
- 1995年 ラビン首相が極右のユダヤ人に暗殺される
- 1999年 DOP による暫定自治期間が終わる
- 2000年 キャンプ・デーヴィッド会議決裂（クリントン大統領が仲介）
第2次（アル＝アクサー）インティファダ開始
- 2001年 アメリカで「9. 11」事件、ブッシュ大統領が「対テロ戦争」提唱
- 2002年 ハマースの自爆攻撃を受けてイスラエル軍が西岸地区を軍事制圧
「守りの楯」作戦、ジェニンで虐殺が起こる
- 2003年 カルテット（米・露・EU・国連）が「ロード・マップ」を提示

■ 2008-09 年ガザ侵攻に関連した動き

《政治的背景》

- 2004 年 3 月 ハマースの精神的指導者シャイフ・アフマド・ヤースィーン暗殺
4 月 ハマースの指導者アブドゥルアズィーズ・ランティエーシー暗殺
5 月 ガザ地区のラファにイスラエル軍が侵攻、大規模な家屋破壊
11 月 PLO 議長のヤーセル・アラファートが死去
- 2005 年 1 月 選挙でマフムード・アッバースが自治政府大統領に就任
9 月 ガザ地区からイスラエル（入植地）が一方的撤退
- 2006 年 1 月 立法（自治）評議会選挙でハマースが第一党になる
3 月 ハマース主導の内閣が成立
EU、米国をはじめ各国が自治政府への援助を停止
- 6 月 イスラエル兵ギラド・シャリットの誘拐を受けた軍のガザ侵攻
7 月 イスラエルとヒズブッラーの間でレバノン戦争が起きる
- 2007 年 3 月 ファタハとハマースによる連立政権が発足
4 月 ウィノグラード調査委員会がレバノン戦争の中間報告書を提出
6 月 ハマースがガザ地区を制圧、ファタハ主導の西岸地区と分離
イスラエルはガザ地区に対する経済封鎖を強化
- 2008 年 1 月 困窮したガザ住民がエジプト国境にある壁を一時的に突破
6 月 ハマースとイスラエルが 6 ヶ月間の停戦に合意
11 月 停戦後初の戦闘が発生、パレスチナ人 6 人が死亡
12 月 19 日 ハマースが停戦の終了を発表

《イスラエルによるガザ攻撃の推移》

- 12 月 20 日 イスラエル軍がガザ北部を空爆、パレスチナ人 1 人が死亡
24 日 ガザからイスラエルへロケット弾攻撃を拡大
イスラエルは閣議でガザ攻撃を決定
26 日 イスラエルはガザに対する燃料供給を停止
- 27 日 11 時半頃 イスラエル軍がガザ地区全域へ大規模空爆を開始
《攻撃》・航空機約 60 機が、ハマースの治安関係施設など 30 カ所以上を爆撃。
・警察本部の爆撃で、警察長官のタウフィーク・ジャーベルが死亡。
・ハマースのロケット弾で、ネティボット在住の男性 1 人が死亡。
《動向》・バラク国防相は記者会見で「戦うべき時が来た」、「テロ関係施設」を
攻撃した、「テロによる被害は看過できない」と述べる。

- ・シリア在住のハマース幹部ハーレド・ミシュアルが、中東の衛星テレビ局アル＝ジャジーラで第三次インティファダを呼びかける。
- ・EU 議長国フランスと潘基文国連事務総長が、即時停戦を呼びかけ。

○ 28 日（空爆 2 日目）

- 《攻撃》・ハマース系のアル＝アクサー衛星テレビ局、モスクなどが爆撃される。
- ・イスラエル軍はガザとの境界沿いに地上部隊を増強。
 - ・イスラエルは閣議で、予備役 6 千 500 人の招集を承認。
 - ・ハマースのロケット弾が、港湾都市アシュドッドに着弾。
- 《動向》・エジプト、レバノン、イエメン、イギリスなどでガザ空爆抗議集会。
- ・国連安保理は、全当事者に即時の軍事行為停止を要求（報道声明）。
 - ・ラファで越境を試みるガザ住民がエジプト警官隊と衝突。

○ 29 日（空爆 3 日目）

- 《攻撃》・内務省、税関事務所、イスラーム大学、警察署などを爆撃。
- ・ハマースのロケット弾攻撃により、アシュケロンで 1 人死亡。
- 《動向》・バラク国防相はハマースとの「全面戦争突入」を宣言。
- ・潘基文事務総長はイスラエル軍による「過度の武力行使」を非難。
 - ・イスラエル軍がレバノンを領空侵犯。

○ 30 日（空爆 4 日目）

- 《攻撃》・エレッツ検問所付近では 30 台以上のイスラエル軍戦車部隊が待機。
- 《動向》・東京、パリ、ロンドン、ワシントンなどで空爆への大規模な抗議集会。
- ・パリで EU 外相理事会が開催される（議長国のフランスが提案）。
 - ・フランスが 48 時間の停戦を提案するが、イスラエルは拒否。
 - ・リビア、サウジアラビア、カタールなどからガザへの救援物資到着。

○ 31 日（空爆 5 日目）

- 《攻撃》・イスマール・ハニーヤ首相の事務所などを爆撃。
- 《動向》・アラブ連盟で緊急外相会議が開かれ、安保理の緊急開催と、拘束力のある決議の採択を求める。国際停戦監視団の派遣を要請。
- ・ハアレッツ紙掲載の世論調査で、国民の 8 割が空爆の継続を支持。
 - ・燃料不足からガザ地区内の主要発電所が稼働を停止。

○ 1月1日（空爆6日目）

《攻撃》・ハマース幹部のニザール・ラヤンが自宅の爆撃で殺害される。

《動向》・UNRWAは「約75万人に緊急の食糧支援が必要」と発表。

- ・サルコジ仏大統領は、リブニ外相と会談し、空爆停止を求める。
- ・リブニ外相は「ガザで人道危機は起きていない」と一時停戦を拒否。

○ 2日（空爆7日目）

《攻撃》・モスク、ロケット弾発射施設など攻撃。ハマース軍事部門幹部を殺害。
・ロケット弾攻撃で、アシュドッドの市民2人が負傷。

《動向》・ハマースのハニーヤ首相はテレビで、イスラエルの攻撃停止が停戦協議の前提となるとの立場を示す。

- ・国連のセリー中東和平特別調整官は、空爆で「ガザのインフラの大部分が破壊された」、「人道上、即時停戦が死活問題」と述べる。
- ・イスラエルは外国籍のガザ地区住民の退避を認め、ヨルダンへ移動。

○ 3日（攻撃開始後8日目、地上侵攻開始）

《攻撃》・深夜、イスラエル軍の戦車部隊ら数千人が、ガザ地区へ侵攻を開始。ハマース武装集団などとの間で激しい戦闘が展開される。

- ・空爆と海上の艦船からの攻撃も続く。
- ・イスラエル側には27日以来、500発以上のロケット弾が着弾した。

《動向》・イスラエル首相府は作戦の目的を「ハマースのテロ設備に打撃を与え、南部地域の安全保障の状況を長期にわたり改善すること」と表明。

- ・ハマース報道官はテレビで「ガザはお前たち（イスラエル軍）の墓場となる」と述べ、徹底抗戦の姿勢を示す。
- ・米ブッシュ大統領が、空爆後はじめての見解で「紛争はハマースが起こした」と述べ、停戦発効に際してハマースの有効な監視を求める。
- ・ロンドン市内でイスラエルの攻撃中止を訴えるデモ行進。首相官邸に靴を投げつける。パリでも2万1千人がデモ行進。

○ 4日（攻撃開始後9日目、地上戦2日目）

《攻撃》・イスラエル軍は、ガザ地区の幹線道路を封鎖して南北に分断。北部で重点的に作戦を展開。ガザ市周辺で激しい戦闘。空爆も継続。

- ・ガザ地区から45キロ離れたベエルシェバに新ロケット弾が着弾。射程距離が延びたことで、イスラエル市民80万人が標的に入る。

《動向》・ペレス大統領「ガザを占領したり、ハマースを潰すつもりはない」。

- ・日本の「世界平和アピール七人委員会」がガザ攻撃中止をアピール。
- ・イスタンブール市内で 20 万人のガザ侵攻抗議集会が開催。イスラエルと同盟関係をもつトルコ外務省は「軍事的な解決の模索」を否定。

○ 5 日（攻撃開始後 10 日目、地上戦 3 日目）

- 《攻撃》・ガザ市内の激戦で、イスラエル軍が自軍を誤射。兵士 4 人が死亡。
- ・ザイトゥーン地区でイスラエル軍が民間人を建物内に誘導して攻撃。屋内にいた 110 人のうち 30 人が死亡。
- 《動向》・イスラエルの国務次官は、作戦が順調に進んでいることを強調。
- ・ハマースの報道官は、ディモナ（イスラエル国内）の核施設をロケット弾で攻撃すると威嚇。
 - ・ハマースは空爆後初めて、対外交渉の代表団をエジプトへ派遣。
 - ・サルコジ仏大統領はイスラエル、パレスチナ自治区、エジプト、シリアを歴訪し、首脳会談をもつ。

○ 6 日（攻撃開始後 11 日目、地上戦 4 日目）

- 《攻撃》・ジャバリア難民キャンプ内の国連（UNRWA）学校がイスラエルの攻撃を受け、避難していた 41 人が死亡。 国連事務総長が非難。
- ・ハマースのロケット弾が、ガザ地区から 45 キロのゲデラに着弾。
- 《動向》・ムバラク大統領はサルコジ大統領との協議を受けて、即時停戦とガザ境界の警備強化などを含む調停案を提示。
- ・国連安保理は、リビアの停戦決議案について公開協議を開始。
 - ・アル＝カーイダのザワヒリが初の声明。ガザ攻撃を「イスラームに対するシオニスト、十字軍の戦争の一貫」と批判する。
 - ・ベネズエラ外務省は軍事作戦を非難して、同国駐在イスラエル大使と外交官を国外追放すると発表。

○ 7 日（攻撃開始後 12 日目、地上戦 5 日目）

- 《攻撃》・イスラエル軍は、ガザ地区への人道支援物資の搬入を可能にするため、27 日の大規模空爆開始後はじめて軍事作戦を一時停止。 既定の 3 時間の停止後、交戦・空爆は再開した。
- 《動向》・イスラエル首相府は、ガザ住民に生活物資を供給するため「人道回廊」を設置する方針を明らかにした。
- ・ハマース幹部は調停案について「協議中」と述べ、作戦停止の間はロケット砲を発射しないと表明した。

○ 8日（攻撃開始後 13 日目、地上戦 6 日目）

《攻撃》・国連の救援物資を輸送中の UNRWA のトラックを、イスラエル軍が砲撃し、職員 1 人が死亡、2 人負傷。

・イスラエル北部のナハリヤに、レバノン南部からロケット弾 4 発が撃ち込まれて 3 人負傷。ヒズブッラーは関与を否定。

《動向》・UNRWA が、ガザ地区での食糧輸送など一部の活動を停止。

・ペレス大統領は、攻撃の「目的はガザをイランの衛星地帯にしないことだ」「われわれは停戦ではなく、テロの撲滅を求めている」と発言。

・国連安保理は、ガザでの「即時かつ恒久的な停戦」とイスラエルの撤退を求める決議第 1860 号を採択（賛成 14、棄権 1＝アメリカ）。

○9日（攻撃開始後 14 日目、地上戦 7 日目）

《動向》・イスラエルは閣議で国連安保理の停戦決議を拒否することを決定。

ガザ地区でのハマース拠点に対する地上攻撃の継続を指示。

・ハマースの代表団が、エジプト調停案を協議するためカイロ入り。

・パレスチナ自治政府のアッバース大統領が、任期満了を迎える。

・国連人権高等弁務官は、イスラエル軍によるガザ攻撃での行動が「戦争犯罪を構成する」として、調査の必要性を指摘。

・イディオト・アハロント紙掲載の世論調査で、回答者の 9 割が今回の軍事作戦を支持。封鎖解除と引き換えの停戦に 8 割が反対。

・国連スポークスマンは、イスラエル国防省との新たな安全保障合意に基づき、活動の早期再開を目指していることを声明。

○10日（攻撃開始後 15 日目、地上戦 8 日目）

《攻撃》・イスラエル軍は南部ハーン・ユニスのハマースの治安施設や、北部のベイトラヒヤの市場などを空爆。

・4 発のロケット弾がアシュケロンに着弾、3 人が負傷。

《動向》・エジプトでの停戦協議は、ラファでの国境管理や、ハマースの再武装を防ぐ方策をめぐる交渉が難航。

・アッバース議長は、エジプトの調案を拒否した場合イスラエルには「血の滝を持続させた責任がある」と会見で述べる。

・英紙タイムスは、国境管理を再度ファタハに任せるという案が欧州の外交団から出されていることを報じる。

・ロイターは、アメリカが 12 月 31 日に借り上げた船で、ギリシアから数 100 トンの武器をイスラエルへ輸送する予定であることを報じる。

■ ガザ地区の基礎データ（UNRWA のホームページ等より）

【地理】

イスラエル南西に位置。南端をエジプトと接し、西に地中海を臨む。
東西約 10 キロ、南北約 40 キロの細長い地帯で、総面積は約 360 平方キロ。

【人口】

約 150 万人。世界で最も人口が過密な場所のひとつに数えられる。
（例：ビーチ難民キャンプでは、1 平方キロ四方の中に約 8 万人が住む）
住民のうち約 90 万人が、1948 年戦争による難民とその子孫である。
各難民キャンプで UNRWA に登録された難民の人数は約 47 万 8 千人
（2006 年 12 月現在）。

【宗教】

大半がスンナ派イスラーム教徒。少数だがキリスト教徒も存在する。

【主要な町】

北部のガザ市、中・南部のハーン・ユニス市、南部のラファ市
ガザ市には UNRWA 本部と、UNRWA ガザ・フィールド事務所が存在する。

【難民キャンプ】

ナクバによって住む場所を追われた約 20 万人の人々が主に住む。
出身地は、地中海沿いのヤーファーや、ネゲブ砂漠の町ベエルシェバ（ビール・サバア）とその周辺の村々を中心。キャンプは以下の 8 か所。

ジャバリア難民キャンプ [10 万 6 千人]

ラファ難民キャンプ [9 万 7 千人]

ビーチ（シャティ）難民キャンプ [8 万人]

ヌセイラト難民キャンプ [5 万 8 千人]

ハーン・ユニス難民キャンプ [6 万 1 千人]

ブレイジ難民キャンプ [2 万 9 千人]

マガジ難民キャンプ [2 万 3 千人]

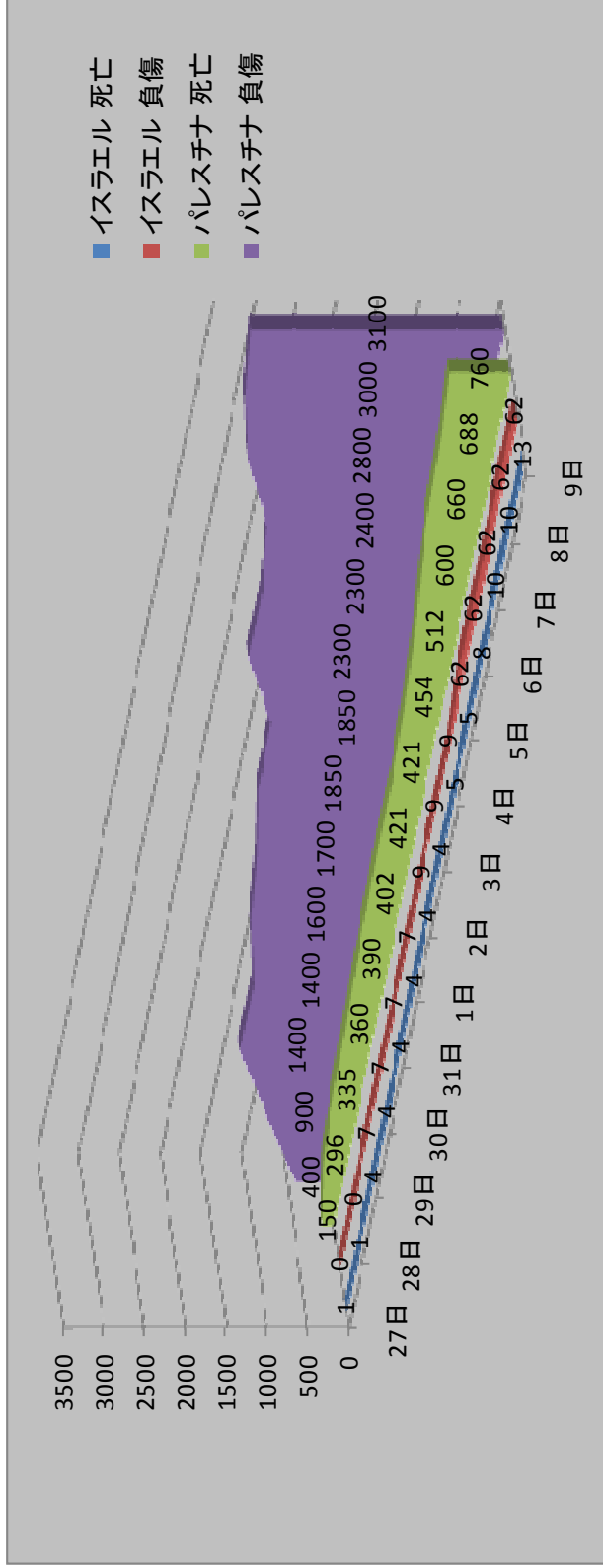
ディル・アル＝バラハ難民キャンプ [2 万人]

（= [] 内は 2006 年 12 月時点での登録難民人数）

■ ガザ侵攻によるイスラエル側／パレスチナ側の死傷者数推移

	1日目 12月27日	2日目 28日	3日目 29日	4日目 30日	5日目 31日	6日目 1日	7日目 2日	8日目 3日	9日目 4日	10日目 5日	11日目 6日	12日目 7日	13日目 8日	14日目 9日
イスラエル死亡	1	1	4	4	4	4	4	4	4	5	5	8	10	13
イスラエル負傷	0	0	7	7	7	7	9	9	9	62	62	62	62	62
パレスチナ死亡	150	296	335	360	390	402	421	421	454	512	600	660	688	760
パレスチナ負傷	400	900	1400	1400	1600	1700	1850	1850	2300	2300	2400	2800	3000	3100

(資料元：guardian.co.uk の特集サイト The Israeli attack on Gaza の数字をもとに作成)



■ 関連情報サイト

《オルタナティブ情報》

- 「日本語で読む中東メディア」(日本語) 特集「イスラエルのガザ攻撃」(中東での報道の東京外国語大学による翻訳記事)
http://www.el.tufts.ac.jp/prmeis/news_j.html
 - 「中東の民主化と政治改革の展望」パレスチナ (日本語) (イスラーム地域研究「中東の民主化」班のデータベース)
http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~dbmedm06/me_d13n/database/palestine/palestine_all.html
 - 「パレスチナ・アーカイブス」(日本語) (パレスチナ情報センターが扱う文書アーカイブス) <http://palestine-heiwa.org/#ac>
 - 「ナブルス通信 パレスチナ・ナビ」(日本語) (現地から届いたメールなどの翻訳) <http://00000000000.net/p-navi/info/>
- 《マスメディア》
- 英紙ガーデーミアン (英語) : 特集 The Israeli attack on Gaza (空爆開始後の攻撃の状況と犠牲者数が日ごとに閲覧可能)
<http://www.guardian.co.uk/world/interactive/2009/jan/03/israelandthepalestinians>
 - イスラエル紙ハアレツ (英語) : 特集 Special Coverage Warfare in Gaza (左派の主要紙。分析記事、写真など)
<http://www.haaretz.com/hasen/spages/1051226.html>
 - AFP 通信 (日本語) : 特集「イスラエル軍がガザ地区を攻撃」(写真で見るガザ地区侵攻、使用武器の図解など)
<http://www.afpbb.com/middle/1484>
 - 朝日新聞 (日本語) : 特集「ガザ侵攻」 <http://www.asahi.com/special/09001/index.html>

■ 参考になる図書

- エリック・アザン著；益岡賢訳「**占領ノート：一ユダヤ人が見たパレスチナの生活**」現代企画室, 2008.10,
- S・K・アブリッシュ著 林睦子訳 平山健太郎解説「**アブリッシュ家の人々 あるパレスチナ人家族の四代記**」三交社 (1993/01)
- アミラ・ハス著；くぼたのぞみ訳「**パレスチナから報告します：占領地の住民と
なって**」筑摩書房, 2005.5
- アモス・オズ著；千本健一郎訳「**贅沢な戦争：イスラエルのレバノン侵攻**」晶文社, 1993.10
- 板垣雄三著「**石の叫びに耳を澄ます：中東和平の探索**」平凡社, 1992.7
- 板垣雄三編「**「対テロ戦争」とイスラム世界**」岩波新書, 2002.1.
- 白杵陽著「**世界化するパレスチナ/イスラエル紛争**」岩波書店, 2004.5,
・・・「**中東和平への道**」山川出版社(世界史リブレット；52), 1999.11
・・・平井玄構成「**イスラムの近代を読みなおす**」毎日新聞社, 2001.12
- 大岩川和正著「**現代イスラエルの社会経済構造：パレスチナにおけるユダヤ人入植
村の研究**」東京大学出版会, 1983.2
- 木村申二著「**パレスチナ分割：パレスチナ問題研究序説**」第三書館, 2002.8
- 黒木英充編「**「対テロ戦争」の時代の平和構築**」東信堂, 2008.8.
- 芝生瑞和著「**パレスチナ**」文春新書, 2004.3
- ジミー・カーター著；北丸雄二, 中野真紀子訳「**カーター、パレスチナを語る：
アパルトヘイトではなく平和を**」晶文社, 2008.6
- ガッサーン・カナファーニー著；黒田寿郎, 奴田原睦明訳「**太陽の男たち；ハイファ
に戻って**」河出書房新社, 1988.12
- ペレツ・キドロ編著；田中好子訳「**イスラエル兵役拒否者からの手紙**」日本放送
出版協会, 2003.1
- 高橋和夫著「**アラブとイスラエル：パレスチナ問題の構図**」講談社現代新書, 1997.1
- E. W. サイド [著]；中野真紀子訳「**イスラエル、イラク、アメリカ**」、みすず書房,
2003.1
・・・「**オスロからイラクへ：戦争とプロパガンダ 2000-2003**」みすず書房, 2005.11
・・・「**パレスチナとは何か**」(ジャン・モア写真)、岩波書店, 2005.8
・・・「**パレスチナは、いま**」みすず書房, 2002.6
・・・「**パレスチナ問題**」みすず書房, 2004.2
- エリアス・サンバー著、飯塚正人監修、「**パレスチナ**」(「**知の再発見**」双書 103), 198pp,
創元社, 2002.6.10.
- 立山良司著「**エルサレム**」新潮社, 2004.1

- ・・・「中東和平の行方」中央新書, 1995.9
- 田浪亜央江著「「不在者」たちのイスラエル：占領文化とパレスチナ」インパクト出版会, 2008.6
- 中東の平和をもとめる市民会議編「パレスチナ問題とは何か」未来社, 1982.11
- 土井敏邦編「パレスチナはどうなるのか」岩波ブックレット, 2007.11
- ・・・「現地ルポパレスチナの声、イスラエルの声：憎しみの“壁”は崩せるのか」東京：岩波書店, 2004.3
- ・・・「沈黙を破る：元イスラエル軍将兵が語る"占領"」岩波書店, 2008.5
- 豊田直巳著「パレスチナの子供たち：写真集」第三書館, 2003.4
- エミール・ハビービー著；山本薫訳「悲楽観屋サイドの失踪にまつわる奇妙な出来事」作品社, 2006.12
- 奈良本英佑著「パレスチナの歴史」明石書店, 2005.7
- 早尾貴紀著「ユダヤとイスラエルのあいだ：民族/国民のアポリア」青土社, 2008.3
- 広河隆一編「NAKBA：パレスチナ 1948」合同出版, 2008.3
- ・・・「パレスチナ」岩波新書, 2002.5
- ・・・パレスチナ・ユダヤ人問題研究会編「ユダヤ人とは何か」三友社出版, 1985.12
- 古居みずえ著「ガーダ：女たちのパレスチナ」岩波書店, 2006.4
- ・・・「パレスチナ瓦礫の中の女たち」岩波書店, 2004.2
- ジョン・J・ミアシャイマー, スティーヴン・M・ウォルト著；副島隆彦訳「イスラエル・ロビーとアメリカの外交政策」講談社, 2007.9-2007.10
- ミーダーン「パレスチナ・対話のための広場」編「イラン・パペ、パレスチナを語る：「民族浄化」から「橋渡しのナラティヴ」へ / イラン・パペ語り」柘植書房新社, 2008.4
- 森沢典子著「パレスチナが見たい」ティビーエス・ブリタニカ, 2002.6
- 「現代思想」臨時増刊「総特集思想としてのパレスチナ」青土社, 2002.6